

# 御土居

## — 京都の城下町化 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 天正年間、長く続いた戦国時代の争乱に終止符が打たれ、豊臣秀吉によって天下統一がなされました。秀吉は京都を本拠地とすべく都市の大改造に着手しました。

まず、平安宮の跡地に天守閣や堀を備えた城郭である聚楽第<sup>じゅらくだい</sup>を造営し、これを中心に大名屋敷町を建設しました。次いで、御所を修復し、まわりに公家屋敷町を配置しました。さらに京中に散在していた寺院を集中し、寺町・寺ノ内を形成しました。また、平安時代以来の碁盤の目の町割りに新道を通し、短冊形の地割りに変更しました。その仕上げとして、天正十九年(1591)に京都を囲む御土居を築きました。

御土居の範囲は、北は上賀茂から鷹峯、西は紙屋川から東寺の西辺、東は鴨川の西岸、南は東寺の南側の九条通まで。南北8.5km、東西3.4km、総延長は22.5kmにも及びます。内側は洛中、外側は洛外と呼ばれ、要所には出入り口として、いわゆる「京の七口」がつくられました。その工事は1月に始まり、なんと5月には完成したとされています。このようにして城下町が完成しました。

御土居の構造 御土居は、外敵の襲来に備える防塁と、川の氾濫から市街地を守る堤防として築か



堀の堆積層が見える 南区西九条鳥居口町の調査(北東から)



左半分が御土居基底部、奥が現存する御土居 市立北野中学校の調査(東から)

れました。その構造は、外側に堀を巡らせ、内側には土を盛り上げ台形状の土塁を築いたもので、土塁上には竹木を植えていたようです。堀は、西辺の紙屋川(天神川)や東辺の鴨川などの河川や、池、沼など自然の地形をうまく利用したことによって短期間で完成しました。

江戸時代の『京都惣曲輪御土居絵図』には土塁幅は「拾壹間壹尺」から「拾六間」、堀の幅は「式十間」などと記されています。

発掘された御土居 御土居の南側およそ3分の2の範囲は、平安京の範囲と重複していることから、平安京を目的とした発掘調査で御土居の遺構が発見されることがあ



出土した墨書きのある木製品



出土した木製品の数々

ります。しかし、発掘によって現れる土塁は、その基底部分が残っているだけで、造営当初の姿からはほど遠い状態です。一方、堀は埋め戻されて平坦になっているために、掘り下げると造営当初の形状と、さらに埋没していった過程や状態も知ることができます。

これまでの御土居の発掘調査で、土塁や堀の規模がよくわかったものが4件ありました。それらによると土塁の幅は、基底部分で約20m、高さは残存高で約2mありました。堀の幅は12.5m～20mと違いがみられ、深さも1.5～2.5mと一定ではありませんでした。堀の規模や形状は、その立地する地形や場所によって施工が変えられていたとみられます。

堀の底部では、畦状の高まりが数ヶ所で確認できたところがあり、堀には水が溜まる構造になっていたようです。また、底部に凹凸が

認められていますが、これは、作業期間を短縮するために複数の作業班を投入した結果、担当範囲の深さが異なったことにより生じたとみられます。

出土した遺物 発掘によって御土居の堀からは、さまざまな種類の遺物が出土しています。その内容は、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、石製品など、当時の人々が使用した、生活に密着した物品です。他には、多量に出土した木製品が目立ちます。堀の中には、水分を多く含んだ泥土層が厚く堆積しており、木製品はこの湿った泥土の層でパックされていたため、埋没した当時の状態を良く保っていたのです。

木製品には、容器・食器・調理具・服飾具・文房具・計量具・部材・楽器・遊戯具など、生活や生産・娯楽に関するものなどがあり、これらから当時の人々の暮ら

しぶりを知ることができます。

また、なかには荷札などの文字を墨書するものも含まれており、年号を記すものも少数ですが出土しています。それらによると、堀は、完成後100年ほどで完全に埋没したらしく、御土居の堀は長い期間にわたり都市住民の生活廃材の捨て場となっていました。

おわりに 戦国時代が終わって初めて、平安京では施工されなかった城塞が京都の街を囲みました。秀吉の京都改造は、居城聚楽第を中心にした城下町京都の創成でした。

現在、目にする京都の景観の原点は、平安京の姿ではなく、この時期の城下町がベースとなっています。さらに、この姿が全国各地に造られた城下町の基本形となっており、各地の小京都は秀吉の造った城下町京都を見習ったものといえます。 (小檜山一良)